

『5-STAGE 英文法完成』の改訂によせて しつこいほど反復するから定着するのだ！

木村 達哉

1. 中学校学習指導要領改訂に合わせて

2017年3月31日に新学習指導要領が告示され、中学校の英語指導が従来のものと少しだけ変わることをなった。おそらくその告示の「教育目標」に基づいた形で教科書も新しい内容となるはずである。

2011年に発刊した拙著『5-STAGE 英文法完成 BOOK 1～3』は、著者である私が驚くほど多くの学校でご愛用いただいている。当初はこんなにも同じ内容を反復するようなタフな問題集を採用する学校は少ないのではないかと思われたが、中高一貫校だけでなく、公立中学校でも使っていただいていると聞き、感謝している。その事実はおそらく指導者の方々がいかに英文法指導が重要であるかを実感されていることの証左であろう。

編集担当者から中学校学習指導要領改訂に合わせて本書も改訂したほうがいいのではないかとこの連絡をいただいたとき、こんなにも多くの生徒たちが使っている本の改訂作業は慎重に行わねばならないと、緊張しながらパソコンを立ち上げることになった。

2. 英文法学習の目的地

私が教員になってすぐのころあたりから、いわゆる四択問題がたくさん掲載されている問題集が何冊も発刊され、それなりに売れていた。各社が競争するかのようその手の問題集を出し、英語の教員がなにを採用するのかわで頭を悩ませるような状態がずっと続いていたように思う。さすがにもう四択問題集では英文法の知識が定着しないということが理解され、最近では学校での一括採用が激減している。

文部科学省に言われるまでもなく、英語も日本語もツールであり、そのツールを使いこなすためには様々な表現や単語を知っておかねばならない。そういった知識のない人間がある言語を使いこなせるわけがない。それと同時にその言語のルールを知って

おくことが大切である。日本語の場合だと、どういったときに「わたしは」になり、どういったときに「わたしが」になるのかというようなことは、我々日本人の場合、幼少のころからミスをすれば親や教師に訂正されたものである。自然と身についたと勘違いしている日本人も多いけれども、単語集(日本語の場合は漢字ドリルであることが多い)とともに、周囲の人たちの努力によって日本語文法を叩き込まれてきたのである。

英語にもルールがあり、文法とか語法とかと呼ばれている(以前は構文と呼ばれていた時期もあったが、最近はそのような呼び方を耳にしない)。私が高校生のときには「Grammar(文法)」という科目があり、しっかりと指導されていたので読めるようになり、また書けるようになった。一方、現在は科目の名前が英文法を軽視した形になっているものだから、中には英文法なんて気にしないでいいというアマチュアの人たちが、少数派ではあるが、出てきているように思う。そして楽をしたい生徒たちは、どうしてもそういうアマチュアの人たちの声が魅力的に映り、「そうだ！英文法なんて要らないはずだ」という意識を持つに至る。中には英文法があるからつまらないんだという驚くべき主張までなされる。言うまでもないが、英文法を知らないから英語がつまらないのに。

英文法の目的地は常に「正確に書く(話す)こと」である。アウトプット(書く・話す)をする際に正確な英語を使えるようにするために英文法を勉強するのである。インプット(読む・聞く)活動の場合には、英文法を理解していない人であっても相手の言い分を理解できる場合がある。例えばある奥様が、My husband is traveling abroad, so I'm at home by myself. と言ったとする。英文法を理解していない人が現在進行形を理解せずに「そうか、この人の旦那さんは習慣的に海外旅行をするから、この人は家

で1人であるんだな」と勘違いをしたとしても、「家で1人である」ことを理解したことになるので、会話は比較的スムーズに続きやすい。一方、自分が書いたり話したりする際に文法的なミスをする、相手に思わぬ誤解を与えることになるし、それをもしも外交官や企業戦士がしたとすれば、甚大なる被害につながるようになる。英文法は書いたり話したりする際にミスをしなないようにするために学ぶのである。決して四択問題に正解するためのものではない。そこを理解して英文法の指導をしていなければ、いくら四択問題集を何周も何周も反復したところで、英語を書かせたら文法的なミスを生徒たちが頻発させることになるのは当然である。英文法指導のゴールはひたすら書かせることなのである。

3. 正確な英語で書くために

だからと言って、英文法を学んだら即座に正しく英語が書けるかという決してそういうわけではない。日本人は英語を読んだり書いたりすることはできると言われるけれども、決してそうではなく、英語を書ける日本人などかなりの少数派であることは誰でも知っているのではないか。我々英語のプロであっても正しく英語を書くのにどれだけ辞書をひいていることか。ましてや英語を学び始めて数年の高校生や大学生が正しい英語で文章を書くのは至難の業で、それなりのプロセスを踏まなければならない。

なにより大切なのは理解である。進行形は一時的行為を表す、仮定法過去は現在の事実とは異なることに対する願望や欲求などを表す、同格は、倒置は、完了不定詞は…そういったことをいちいち正しく理解していない人間が、それを使って正しく英語で文を書けるはずがない。したがって授業の中で項目ごとにしっかりと教員が生徒たちに説明し、そして理解させることがなによりも求められる。現在は「英語表現」という科目の中で文法指導を行っている学校が多いが、教員の文法知識が不足していると生徒たちに伝わらないので、我々教員もしっかりと理解しなければならぬのは言うまでもないだろう。

さて、理解ができれば即座に書けるかというそんなわけがない。理解している我々であってもミスをするのだから(もっと言えば、ネイティブであっても文法のミスをする)、ましてや生徒たちにこの段階で「何回も説明したでしょ」と言ったところで

どうしようもない。人間の脳はいくら覚えたところで、1日も経てば74%も忘れてしまう生き物であることはエビングハウスが指摘するところである。

理解したことを脳に刷り込むことが大切である。そのために様々な手段を使う。まずはインプットができるように、つまり英語で書かれたものが理解でき、うまく日本語に直せるように、あるいはその文法項目を使った英文を話されたら正しく聞き取れるように、トレーニングを重ねることになる。四択問題などを重ねても構わないが、あくまでも初期段階での指導なので、高2や高3になっても四択問題を何度も何度も反復していると、この後に控える最も大切なアウトプット段階の時間が短くなってしまふ。

インプット活動を何度もやっているうちに、それを使って簡単な英文なら書けるようになってくる。未習内容や、日本人が苦手とする冠詞や前置詞などのミスはあるかもしれないが、少なくとも教わった文法項目であれば(語彙さえ与えられれば)書けるようになるはずである。ここまでくれば、その文法項目が脳にしがみつきつつある段階であると言えるだろう。まずは部分英作文をやったり、簡単な1文の英作文をやったりといった活動を通じて、その項目が使えるようになってくる。

ただし、時制が使えるようになって、助動詞が使えるようになって、そこで用いられる名詞や動詞といった内容語の知識がなければ新しい英文を書けるようにはならないので、英文法と英単語や熟語の学習は常に両輪で、同時に行わねばならない。

4. と言っても脳は忘れる

時制を征服し、助動詞をやっつけ、準動詞を倒し、仮定法を支配し…このペースでいくと英文法の神になるのは時間の問題だ!と思うのは夢物語で、残念ではあるが、そううまくはいかないのである。なぜならば、時制を征服し、助動詞をやっつけたころには時制の知識が徐々に薄れ始め、準動詞を倒している間に時制の知識は消え、さらにはせっかくやっつけたはずの助動詞の知識までもが消え始めるからである。これは前述の通り、我々の脳は「これは要らないな」と思った知識や情報をデリートしていくという機能を持っているからである。私はあちこちの学校で講演をさせていただいているが、一番多い質問が「僕は覚えるのが苦手」や「私はすぐに忘れ

る」といったものである。私は常に「それは健康な証拠だから喜びなさい」と回答することにしている。

本校からは多くの生徒が東京大学などの難関大学に合格する。そういった生徒たちも、なにか特別な東大脳といったようなものを持っているわけではない。なにより大切なことは「自分はすぐに忘れてしまう」と思いながら勉強をしている生徒が合格しているという事実である。成績のいい生徒こそ「自分は忘れっぽい」と自覚している。逆に少し利口な生徒は、自分はそれなりにおつむがいいということを自覚し、覚えたから大丈夫というような間違った意識でいる。なので伸びないし、やはりすぐに忘れてしまうのである。

ある生徒が『5-STAGE 英文法完成 BOOK 1～3』はこれでもかというくらい同じ項目が出てくるが、あまりにも反復しすぎではないか、こんなにも反復しなくても自分はできると思うと私に言いにくたことがある。なにしろ時制と助動詞が終わったらその確認ページがあり、次に不定詞と動名詞と分詞が終わったらその確認ページがあるだけでなく、時制から分詞までのすべての復習ページが待っているのである。進んでは戻り、また進んでは戻りをひたすら繰り返すような英文法の問題集は存在しないのではないだろうか。ただ、これくらい反復しているのに、それでも忘れてしまうのが私たちの脳なのである。その生徒には、自分の頭がいいと思うなら従わなくてもいいが、少なくとも私レベルの脳では日常的に使わない英語のルールなど、この程度は反復しないとすぐに抜け落ちてしまうのだと説明した。その彼も来年の入試で間違いなく東京大学に合格することだろう。あの時に指導に従った彼には「な、従ってよかったやろ？」と卒業時に言ってやりたい。

英単語にしても英文法にしても、普段使わないものはどんどん忘れていってしまう。勉強時間ではなく、出会う回数で決まるのである。九九を覚える際、2の段を覚えて3の段に行くときには、もう一度2の段から口に出して反復し、4の段に進む際にももう一度2の段からやり直しを繰り返したはずである。翌日に5の段からやるときも、2の段から声に出したはずである。英単語や英文法の学習にも同じ態度が求められる。だから私はこの『5-STAGE 英文法完成 BOOK 1～3』をつくったのである。そして冒頭にも述べたが、こんなにも反復回数の多い、タ

フな問題集を全国の様々な学校で採用いただいていることを嬉しく思うだけでなく、私と同じ考えを持っている英語科の先生方がこんなにも多いことに、英語教育界の未来を託したいと思う。

5. どこをどう改訂したのか

新しい中学校学習指導要領にしたがって、内容を見直したのは言うまでもない。仮定法や現在完了進行形や過去完了の配列を検討した。教科書によって登場する箇所が異なるので、どこにそれらを押し込めるのかに苦慮したが、常識的な場所に各項目を置いたつもりである。使ってくださっている学校の実情に応じて指導していただければ幸甚である。

それ以外の改訂箇所について列挙したい。

- (a) リスニング(ディクテーション)を **FOURTH STAGE** に、英作文を **FIFTH STAGE** に置き、ディクテーションには部分ディクテーションを追加した。

インプット活動を行ってからアウトプット活動をするのが英文法学習の目的に沿った形であろうから、リスニングを英作文の前に置いた。さらに、リスニング初心者の生徒たちも多くいるだろうから、全文のディクテーションを行う前に部分ディクテーションを追加することで、そういった生徒たちに寄り添った。

- (b) 現代社会で実際に使う語彙を増やし、**WORD CHECK** 掲載語は本文中に*をつけることで語彙学習をしやすくした。

本書が初めて発刊されたときから、我々が使用する語彙がずいぶん変化している。SNS や **smartphone** などが一例である。このような語彙も問題文中に使用した。英文法の学習をする際に「使う」を意識するのであれば、やはり語彙を変化させる必要があると感じたためだ。

- (c) 音声 CD に加え、QR コードからの音声再生と「数研発音マスター」を使った発音練習を可能にした。

CD デッキを持っていないがスマートフォンなら持っているという環境もあるだろう。生徒たちにはリスニングの勉強をして、着実に英語の耳を

つくっていてももらいたい。

6. 最後に

新型コロナウイルス感染症の拡大で、生徒たちの学びが大きく変化すると報じられている。しかし、英語の学びが変化することなどあり得ない。せっかく人生の大切な時間を割いて外国語を学ぶのであるから、入試のためだけの学習ではなく、大学や社会で正しく使えるための学習姿勢を貫いていただきたい。拙著を使って学習した生徒たちが、英語を書いたり話したりするには自信があると胸を張り、世界中を舞台に活躍してくれることを心から願っている。

(灘中学校・高等学校 教諭)